魚まち通信

発行責任者　魚まち歩観会
会長　植田　芳男

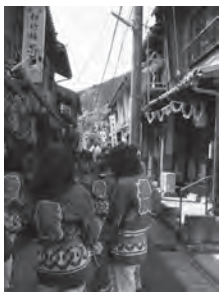
■魚まち通信目次・・・・・

・トピック
　長島神社御造営
・63年ぶり…元の姿に
・長島神社で
　「昭和の縁日」
・魚まち紹介
　【本町の道標】
・お知らせ
・コラム
　『熊獄さんの火渡り』
・カルタ「す」
・魚まちの名所
・昔ながらの漁法・漁具
　シビ漁
・味自慢
・歩観会の活動報告

長島神社御造営

二十年ぶりの御木曳き行事に町中がわいた

5月4日と5日、長島神社の御木曳き行事に長島の各地区から7台の山車が出て、町を練り歩いた後、神社に献木が奉納されました。のぼりや提灯、大漁旗で彩られた町を音頭とりの歌声と氏子の掛け声が響き渡り、見物客も参加者も一緒になって祭り気分に酔いしれました。



陶板で魚まち紹介

本町の道標
（陶板29番・本町）

▼古い時代の熊野街道は、長島や二郷を通らず、赤羽谷へ向かう山間の道であった。即ち、大内山・栃古からツヅラト峠、志子、中桐・前山、嶋地峠、加田のルートである。▼室町初期より、赤羽谷は土豪・奥村氏の根拠地で、紀北地方の中心であった。この頃の長島浦は、わずか四、五十軒の漁村に過ぎなかったという。▼長島発展の礎を築いたのは、室町初期の人、加藤甚左衛門尉であるらしい。長島浦を本拠地と定めて山城を築き、埋立地・新町に商家を集めて町並みを整備したのである。▼江戸時代、長島浦はますます賑わう。特に本町角はその中心となった。紀州藩が新たに「荷坂峠ルート」を整備し、長島の町中へ引き入れたからだ。▼約百五十年前（安政四年）、この角に高さ1㍍余りの石柱が立てられた。旅人の道しるべとして、旅館の女将・嵐屋とき等五人が共同自費で設けたもの。「西、左いせ道。北、右くまの道、是より那智山に二十四里…」と文字が刻まれている。彼女たちの奉仕の心と、当時の辻のざわめきを偲ぶことが出来る道標である。

参考文献：『長島町史　第二章（三）・（四）』より

この本町道標は、郷土資料館の敷地内に保管されていましたが、5年前に元の場所に移されました。

最近まで、二つに折れた跡がありました。昭和28年の船だんじりで折れたと言われていますが、その後、何度も車がぶつかったからだとも聞いています。

昨年の9月に山口石材店さんに修復をたのんだところ無償でなおしてくれました。その作業に立ち会った時、ノミで割った石の中央につなぎの鉄の棒が入っているのがみつかり驚きました。その修復も数十年前に山口石材店さんがしたということです。（植田）

63年ぶり…元の姿に

長島神社の狛犬が修復されました。

この狛犬は、昭和10年に浜口熊獄さんが奉納してくれたものです。

地元の方は知っていると思いますが、右の狛犬の口が大きく欠けていました。これは昭和22年に大楠が折れて破損したのだそうです。

子供の頃からいつもこの口だと思っていましたが、このほど御造営に合わせて63年ぶりに元の狛犬に戻りました。

長島神社で「昭和の縁日」

マンボウにビンチョウ?手作りのゲームに子どもたちも夢中

5月3日（祝日）、長島神社境内で「昭和の縁日」が開催されました。

御木曳き本番の日は道がせまく、山車が通れなくなることから、屋台が出ませんん。そのため子供たちに喜んでもらい、祭り気分をもりあげるため長島神社御造営奉賛会に頼まれ行ったものです。

この日は、町内や近隣だけでなく、祭りに合わせ帰省していた家族連れでにぎわい、およそ2500人が集まりました。かたぬきやヨーヨー、からあげなどは昼ごろまでに売り切れてしまい、予想以上の人出にびっくり。漁師町長島にちなんだゲーム「マンボウDEぴょん」や「ビンチョウDE一本釣り」など実行委員会手作りのゲームに子供たちはあきることなく何度もチャレンジし、手に入れた景品をうれしそうに抱え帰っていきました。

売上金の一部は東日本大震災の義援金として送られます。会場の義援箱にもこづかいの一部を入れる子どもたちの姿がみられ震災への関心の高さがうかがえました。

この縁日には、町内外から60人のボランティアが来て手伝ってくれました。

魚まち おしらせ

魚まちガイド講座

6月9日から毎週火曜と木曜の全6回

※最終回は現地講座を行います。（日時は未定）

場所：長島多目的会館3階
時間：午後7時半～

あなたも魚まちのガイドをしてみませんか？長島弁しか話せない人も大歓迎です。

「お申し込み・お問い合わせ」
紀北町役場商工観光課
０５９７－３２－３９０５

『熊獄（ゆうがく）さんの火渡り』

向井　清隆

昭和6年12月某日。街路灯の裸電球が点灯すると海岸通りが何やら騒がしくなってきた。

「熊獄さんが火渡りするらしいぞ。」

「ほんとか。」

すでに赤羽川の河口近くの砂浜では、弟子達によってマキが並べられ、一斉に火が点けられた。天に向かって勢いよく燃えだした炎に誘われるように、二郷（東長島）から西（西長島）から老若男女、大勢の人が集まってきた。やがて河口と堤防は人、人、人でいっぱいになり、開始を待つばかりになった。

「やるか。」

熊獄は弟子の一人に合図を送ると、ゆっくりと火の前に歩み出た。九字をきり、何やら呪文を唱え始めたかと思うと、自分が履いていた大きな下駄を無造作に脱ぎ捨て、なんのためらいもなく、火の中に入っていった。一歩一歩ゆっくりと踏み出される足元から沢山の火の粉が舞いあがった。いままで騒々しかった見物人達も、今は固唾をのんでその様子を見守っていた。

全てを渡り終えると、なんと熊獄は、見物人に向かって大きく両手を広げなら、

「熱い、熱い。」

と大声で叫んだのだ。

小さな笑い声があちこちから上り、やがて全体が大きな笑いで包まれた。それは熊獄への嘲笑の笑いでは決してなかった。その頃すでに全国的にその名を知られ、巨万の富を得ていた熊獄であったが、町の人達にとっては昔とちっとも変らない破天荒なままの、我らが『熊獄さん』であることを確かめる温かい笑いに他ならなかった。

やがて熊獄は弟子達を残して一人さっさと、松本の別邸に戻って行った。

（当時の目撃者の証言を参考にして創作しました。）